

7 問題別応答分析と指導上の留意点

表右端の「%」は、無作為に抽出した10%の生徒の正答率である。数値処理のため合計が100%にならないことがある。

大問〔三〕国語基礎力の応答分析、考察、指導上の留意点

問一

調べ学習について、取材メモと会話文の内容読解について、出題した。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問一 (1)	正答	ウ 街路樹による被害について	97	96	76	267	89.7
	誤答	ア 街路樹につく害虫について	2	1	14	17	5.7
		オ 街路樹の伐採方法について	1	3	10	14	4.7
		イ 鈴木さんのけがについて					0.0
		エ 落ち葉の利用法について					0.0

「地域で起きている問題」について、〈取材メモ〉の「問題」を選択する問題である。正答率は89.7%で、高位の<a b - c 型>を示している。〈取材メモ〉を読んで、その問題点を把握すれば容易にできる問題である。誤答ア、オを選択したのは地域に「街路樹」の問題があることは把握してたものの、「害虫」または「伐採方法」に限定した問題と捉えたものである。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問一 (2)	正答	b ア(市役所の人)・c ウ(不公平)	90	83	55	228	76.0
	誤答	b エ(鈴木さん自身)・c ア(不作法)	6	5	12	23	7.7
		b ア(市役所の人)・c ア(不作法)	3	9	10	22	7.3
		b エ(鈴木さん自身)・c ウ(簡単)	1		7	8	2.7
		(その他)		3	16	19	6.4

取材による<話し合い>で、Dさんの発言の意図を理解しているかを問う問題である。正答率は76.0%で、<a b - c 型>を示している。選択肢b、cを組み合わせて考えることが必要とされる。さらに、Dさんの「伐採しない理由」という発言から、逆の立場の存在に気付き、より客観的に問題を捉えようとする視点が必要である。選択肢cの誤答例に「ア(不作法)」が多かったのは、情緒面だけに注目して考えたためであろう。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問一 (3)	正答	エ 鈴木さんの電話番号(適当でないもの)	83	76	52	211	70.3
	誤答	イ 鈴木さんの腰痛の程度	8	11	20	39	13.0
		ア 落ち葉や害虫による被害の実態	5	9	15	29	9.7
		ウ 鈴木さんの家のまわりの様子	1		10	11	3.7
		オ 落ち葉回収や害虫駆除に必要な費用	3	4	3	10	3.3

壁新聞に載せる情報としての妥当性を理解しているかを問う問題である。正答率は70.3%で、<a b - c 型>を示している。事後調査にも電話番号は個人情報であり、掲載するのは適当でないとの回答がきわめて多かった。誤答の中には、設問の「適当でないもの」を選ぶという指示の見落としも多くあったと思われる。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問一 (4)	正答	オ 落ち葉や害虫の写真	86	78	58	222	74.0
	誤答	ウ 葉が茂った街路樹の写真	12	22	37	71	23.7
		エ 市役所の建物の写真	1		2	3	1.0
		ア Aさんたちの集合写真			2	2	0.7
		イ 鈴木さんの顔写真	1		1	2	0.7

話合いの展開からCさんの提案内容を理解し、適当な写真を選択する問題である。正答率は74.0%で、<a b - c型>を示している。Cさんの提案が、Aさんの発言を受けて鈴木さんの困り具合を具体的に伝えるための写真を入れようとするものであることを理解すれば正答に至る。〈取材メモ〉の「調べたきっかけ」にある「鈴木さんが街路樹のことで困っている」という記述には気付いたが、《鈴木さんから聞き取り》にある「虫や落ち葉に困っている」を読み取っていない生徒が、誤答としてウを選択したと思われる。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問一 (5)	正答	ア さまざまな街路樹の種類と特性 (新聞)	97	87	73	257	85.7
	誤答	エ ほかの地域における街路樹の問題 (インターネット)	3	9	13	25	8.3
		イ 街路樹に関係する人たちの意見 (インタビュー)		2	6	8	2.7
		オ 落ち葉や害虫の実際の様子 (現場見学)		2	4	6	2.0
		ウ 街路樹で困っている人の割合 (アンケート)			4	4	1.3

調査したい事柄と調べる方法の組合せとして不適当なものを選択する問題である。正答率は85.7%で、高位の<a b c型>を示している。調査方法の特性を正しく理解しているかを選ぶ問題である。調査の主題を把握し、それにふさわしい方法を選択することが大切である。

問二

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問二	正答	ウ (立つ瀬がない)	83	62	45	190	63.3
	誤答	エ (にっちもさっちも)	7	13	19	39	13.0
		イ (手塩に掛けて)	8	16	13	37	12.3
		ア (歯が立たない)		5	13	18	6.0
		オ (さじを投げて)	2	4	9	15	5.0
		(無 答)			1	1	0.3

慣用表現が適切に用いられている文を選ぶ問題である。正答はウ「彼にまで責め立てられ、私は立つ瀬がない」であり、正答率は63.3%で、<a - b - c型>を示している。

ここで選択肢とした慣用表現は、日常の会話等にも用いられる表現であり、事後調査でも、これらを「聞いたことはある」とする回答が多かったものの、その割合が正答率に比例していない。聞いたことがある表現を、実際に日常生活においても使えるようにする指導が必要である。

問三

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問三	正答	白(い目で見える)・イ(羽の矢)	81	49	45	175	58.3
	誤答	青(い目で見える)・ウ(二才)	12	20	8	40	13.3
		黒(い目で見える)・オ(幕)	2	13	9	24	8.0
		白(い目で見える)・イ以外	5	5	13	23	7.7
		赤(い目で見える)・エ(の他人)		6	3	9	3.0
		黄(い目で見える)・ア(色い声)			1	1	0.3
		その他 (いずれも誤答)		7	18	25	8.3
		(無 答)			3	3	1.0

色を用いた慣用表現に関する問題であり、「□い目で見える」の□に適当な色名を答え、その色名を使う表現を後の選択肢から選ぶ形式である。正答率は58.3%で、<a - b c型>を示しているが、誤答のうち32.3%はいずれかの慣用表現に正答している。慣用表現の多様な語源等についても興味をもたせつつ、問二と同様の方針で指導することが必要であろう。

問四

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問四	正答	エ (母 <u>の</u> 作った弁当を)	100	89	53	242	80.7
	誤答	イ (人 <u>の</u> 話を)		5	22	27	9.0
		ウ (作家 <u>の</u> 村上氏と)		3	19	22	7.3
		オ (あの人 <u>の</u> だ)		2	3	5	1.6
		ア (勉強をする <u>の</u> が)		1	3	4	1.3

例文と同じ働きをする格助詞「の」を選ぶ問題であり、例文「人の多くいるところは」は主格の用法である。< a b - c 型 >を示しており、a, b群に比べてc群の正答率が特に低かった。c群にとって、格助詞「の」における連体修飾格以外の用法は難しかったと言える。文法問題は群間差が生じがちだが、c群には設問のような具体的な文章に即して、他の表現に言い換えさせる等の指導が効果的であろう。

問五

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問五	正答	ア (異口同音)	96	81	61	238	79.3
	誤答	イ (短刀直入)	3	13	27	43	14.3
		ウ (一意専信)		3	4	7	2.3
		オ (急転直化)	1	2	2	5	1.6
		エ (明朗会活)		1	4	5	1.6
		(無 答)			2	2	0.6

正しい表記の四字熟語を選ぶ問題である。< a b - c 型 >を示している。正答の「異口同音」は、生徒にとって日常生活での使用頻度が低い言葉ではあるが、読み方とともに覚えさせておきたい基本的な四字熟語と言える。

問六

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問六 (1)	正答	しずく	95	73	76	244	81.3
	誤答	つぶ	4	16	12	32	10.6
		てき		5	8	13	4.3
		その他	1	2	2	5	1.7
		(無 答)		4	2	6	2.0

「滴 (しずく)」の読みを答える問題である。正答率は81.3%であり、高位の< a - b c 型 >を示している。例文が日常的表現であったためか、訓読みを苦手とするc群も正答率が高かった。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問六 (2)	正答	しさ	98	90	46	234	78.0
	誤答	しさん		2	10	12	4.0
		ししゅん		1	7	8	2.7
		(その他)	2	7	25	34	11.3
		(無 答)			12	12	4.0

「示唆 (しさ)」の読みを答える問題である。正答率は78.0%であり、< a b - c 型 >を示している。「示 (し)」の読みはよくできていたが、「唆」の読みが、特にc群には難しかったと言える。昭和61年における同じ問題の正答率が62.5%、平成10年では62.7%であり、今回は約16%の改善が見られた。しかし事後調査で「唆」の訓読み「(そそのか)す」を尋ねたところ、正答の割合は極めて低

く、「唆す」という語の意味は理解していないと思われる。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問六 (3)	正答	よくよう	94	77	35	206	68.7
	誤答	こうよう	1	5	3	9	3.0
		よくじょう	3	2	4	9	3.0
		(その他)	2	15	33	50	16.6
		(無答)		1	25	26	8.7

「抑揚(よくよう)」の読みを答える問題である。正答率は68.7%であり、<a b - c型>を示している。「揚(よう)」を「じょう」「ば」と読んだ誤答は「場」からの連想と思われる。「抑(よく)」の読みでは、「おう」「こう」「やく」など、誤読例が多数あったが、事後調査で「抑」の訓読み「おさえる」を尋ねたところ、正答率は極めて高かった。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問六 (4)	正答	供(える)	86	69	43	198	66.0
	誤答	備(える)	13	11	24	48	16.0
		備の字形間違い・類字間違い		2	7	9	3.0
		(その他)		6	5	11	3.6
		(無答)	1	12	21	34	11.3

「そな(供)える」を漢字に改める問題である。正答率は66.0%であり、<a - b - c型>を示している。誤答には同音異義語の「備える」が多数見られた。字義を理解させる指導をしたい。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問六 (5)	正答	連鎖	96	89	66	251	83.7
	誤答	鎖の字形間違い・類字間違い	4	8	14	26	8.7
		連口(鎖の部分が空白)		2	8	10	3.3
		(その他)			6	6	2.0
		(無答)		1	6	7	2.3

「れんさ(連鎖)」を漢字に改める問題である。正答率は83.7%であり、<a b - c型>を示している。c群に「鎖」の字形の誤りが多かった。

小問	正誤	解 答 例	a 群	b 群	c 群	合計	%
問六 (6)	正答	伏線	29	9	1	39	13.0
	誤答	副線	18	14	11	43	14.3
		複線	11	14	4	29	9.7
		復線	8	10	9	27	9.0
		(その他)	26	31	39	96	32.0
		(無答)	8	22	36	66	22.0

「物語のフクセン(伏線)」を漢字に改める問題である。正答率は13.0%で、極めて低位の<a - b c型>を示している。抽出した答案には55の誤答例があった。事後調査で「伏線」の使用実態を尋ねたところ、「聞いたことはある」と回答した生徒が多く、耳にはしているが、意味を把握して漢字が書けるまでには至っていないということであろう。「伏線」という概念や文章表現の技法としての効果について指導したい。

<指導上の留意点>

実態及び問題点	
<p>話し合いにおいて、話し手の意図や話し合いの方向をとらえて発言することに課題がある。このように、具体的な発言から話し手の立場や意図を理解し、話し合いの目的に沿って発言する力は、説得力のある文章を書いたり、見通しをもって文章を読んだりする能力とも相通ずる能力であり、社会生活において日常的に必要とされる能力である。</p>	
指導における改善の具体策	
<p>話し合うことについて指導する際には、話し合いの目的に応じた形態を選択し、具体的な言語活動を通して実践的な能力を向上させることが必要である。</p>	
<p>《形式》対話，少人数グループのバズセッション，ポスターセッション，クラス全体の討論，鼎談，ディベート，パネルディスカッション 等</p>	<p>《目的》発想の幅を広げる。課題についての理解を深める。課題解決について共通理解を図る。 等</p>
<p>ここでは、社会生活の中から見出した課題について、様々な立場から検討して自分の意見を確立するための方法としてパネルディスカッションを実施する。ディベートが是非の観点から資料を再構成して話し合うのとは異なり、立場の異なるパネリストの「話し合いを聞く」前半と、フロアとして「話し合う」後半との活動を通して、考えをまとめていく活動である。問題文にある新聞の紙面構成においてもこのような多面的な検討を経ることが必要である。</p> <p>相手の発言意図を理解して話し合うことが難しい生徒に、異なる意見をもっているパネリストの討論をモデルとして経験させるため、コーディネーターは指導者が担当し、パネリストの意見交換のための準備時間も設定した。後半のフロアを交えた討論においても、論点を明確にした発言となるようにコーディネーターが要約して進行するなどの手だてが効果的である。</p>	
<p>パネルディスカッション「通学路の街路樹は必要か」</p>	
<p>学習活動1 <取材メモ>にある「鈴木さん」からの聞き取りの内容を発端として、興味をもった事柄について調べる。(2時間)</p>	
<p>学習活動2 街路樹について興味をもって調べた内容が共通する生徒のグループを作り、グループとしての主張をするために話し合う。 各グループが1人のパネリストを決め、主張をまとめる。(2時間)</p> <p>調査内容例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・街路樹で困っていること (落ち葉・害虫等) ・街路樹の楽しみ (景観向上・季節感等) ・街路樹を植える目的 (環境保全・緑陰形成・交通安全等) ・街路樹の維持・管理 (植樹主体・管理規定等) ・一般的な街路樹の種類 (常緑樹・落葉樹の代表的な樹種等) ・他地区で取り上げられた街路樹の問題 (名古屋市・つくば市等) ・街路樹の歴史について (古代から現代まで等) 	
<p>学習活動3 パネルディスカッションを行う。(1時間)</p> <p>時間配分例</p> <ol style="list-style-type: none"> ①コーディネーターによるテーマと流れの確認 (1分) ②パネリストによる調査内容と意見の発表 (2分×5) ③グループによる討論方針の打合せ (10分) ④パネリスト間の意見交換 (10分) ⑤フロアも参加した討論 (15分) ⑥コーディネーターによるまとめ (2分) 	
<p>学習活動4 パネルディスカッションについて振り返り、新聞原稿を執筆する。(1時間)</p>	